

江戸時代

ふるさと うたの風土記

は
あ
ゆ
り
た

はりまのうた　―ふるさと　うたの風土記―

昭和六十一年三月三十一日発行

編集・発行――兵庫県立図書館（明石市明石公園一―二七）

印刷――ウニスガ印刷（西脇市和布町三九）

目次

播磨	1
東播磨	13
印南・加古・高砂尾上・響の灘	
神戸市	41
塩屋・垂水・野中の清水・舞子	
明石市	57
明石・太寺・人丸・藤江・二見	
加古川市	111
尾上	
西脇市	129
三木市	133
入野	

高砂市	143
曾根・高砂	
小野市	165
加西市	169
加東郡	175
社町	
滝野町	178
東条町	179
多可郡	129
加美町	131
八千代町	131
加古郡	181
稲美町	183
播磨町	183
西播磨	189
飾磨川・夢前川	

姫路市	195
あふの松原・青山・有明山・飾磨・書写・ 総社・津田の細江・姫路城・姫山	
相生市	239
竜野市	245
赤穂市	259
飾磨郡	265
家島町	267
夢前町	269
神崎郡	271
市川町	273
福崎町	274
香寺町	276
揖保郡	277
新宮町	279
揖保川町	280

御津町	281
室津	
太子町	287
赤穂郡	259
上郡町	264
佐用郡	289
佐用町	291
上月町	292
南光町	292
三日月町	293
宍粟郡	295
山崎町	297
安富町	298
一宮町	299
波賀町	300
千種町	300
採録文献	301
播磨の国略図	303

播
磨

朝されば 妹が手に纏く 鏡なす 御津の浜びに 大船に 真
楫繁貫き 韓国に 渡り行かむと 直向ふ 敏馬をさして 潮
待ちて 水脈びき行けば 沖辺には 白波高み 浦廻より 漕
ぎて渡れば 吾妹子に 淡路の島は 夕されば 雲居隠りぬ
さ夜ふけて 行方を知らに 吾が心 明石の浦に 船泊めて 浮
寝をしつつ わたつみの 沖辺を見れば 漁する 海人の娘子
は 小船乗り つらうに浮けり 暁の 潮満ち来れば 葦辺には
鶴鳴き渡る 朝風に 船出をせむと 船人も 水手も声よび
鳩鳥の なづさひ行けば 家島は 雲居に見えぬ 吾が思へる
心和ぐやと 早く来て 見むと思ひて 大船を 漕ぎわが行け
ば 沖つ波 高く立ち来ぬ 外のみに 見つつ過ぎ行き 多麻
の浦に 船を停めて 浜びより 浦磯を見つつ 泣く児なす
哭のみし泣かゆ 海神の 手纏の玉を 家裏に 妹に遣らむと
拾ひ取り 袖には入れて 返し遣る 使無ければ 持てれども
験を無みと また置きつるかも

反歌二首

多麻の浦の沖つ白珠拾へれどまたそ置きつる見る人を無み
秋さらばわが船泊てむ忘れ貝寄せ来て置けれ沖つ白波

遣新羅使人（万葉集）

味さはふ 妹が目離れて 敷栲の 枕も纏かず 桜皮纏き 作

れる舟に 真楫貫き わが漕ぎ来れば 淡路の 野島も過ぎ
印南端 辛荷の島の 島の際ゆ 吾家を見れば 青山の 其処
とも見えず 白雲も 千重になり来ぬ 漕ぎ廻むる 浦のこと
ごと 行き隠る 島の崎崎 隈も置かず 思ひそわが来る 旅
の日長み

反歌三首

玉藻刈る辛荷の島に島廻する鵜にしもあれや家思はざらむ
島隠りわが漕ぎ来れば羨しかも倭へ上る真熊野の船
風吹けば波か立たむと伺候に都太の細江に浦隠り居り

山部宿禰赤人（万葉集）

あま伝ふ時雨に袖も濡にけりひかさのうらをさしてきつれと

藤原朝臣顯季卿（堀河院御時百首和歌）

あまのがは冬は氷にとぢたれや石間にたぎつおとだにもせぬ

読人しらず（後撰和歌集）

あまの川水かけ草の夕露にそふさへあやな袖なぬらしそ

俊恵法師（林葉和歌集）

雨しばしはれまの国とかしこくもすゑの名のみとみことのりせ
し

海雲院（小夜枕）

印南野は行き過ぎぬらし天づたふ日笠の浦に波立てり見ゆ

作者未詳（万葉集）

いにしへに諸かみたちのつどひにし空もはれまの国のしるしや

妻鹿貞祐（小夜枕）

うちつけにはりまかたにもにたるかななるあまかよるかよ
ふらん

（為頼朝臣集）

おとづめのくるみのからにだまされてひかさの浦をめぐる山が
ら

作者不詳

神もさぞ嬉しかるらん日笠浦松のちとせをいのる諸人

安秀（今昔集）

狩くれし天の川原と聞からに昔の浪の袖にかゝれる

西行法師（雲葉和歌集）

きゝわたるあまの川せの橋なれはもみちも見えすかさゝきもな
し

雅有（隣女集）

くるゝまにすゞきつるらし夕潮のひがさの海にあまの袖みゆ

民部卿為家（夫木和歌抄）

さしてしるあすもうらゝと天伝ふ日笠の山は夕ほてりして

西蓮

しかまづにかりの声こそ聞ゆなれいほの隣に鶴やなくらむ

前中納言通房卿（夫木和歌抄）

墨染の袖たちぬれぬあまつたふひかさのうらの春の明ほの

（寂身法師集）

すみよしとみえこそわたれうらとをみいかゝにるへきはりまか
たまて

（為頼朝臣集）

立ちかはります田の池の浮尊来れども絶えぬものにぞ有りける

（柿本集）

臣女の 匣に乗れる 鏡なす 御津の浜辺に さにつらふ 紐
解き離けず 吾妹子に 恋ひつつ居れば 明け闇の 朝霧隠り
鳴く鶴の ねのみし泣かゆ わが恋ふる 千重の一重も 慰も
る 情もありやと 家のあたり わが立ち見れば 青旗の 葛木
山に たな引ける 白雲隠る 天さがる 夷の国辺に 直向ふ
淡路を過ぎ 粟島を 背に見つつ 朝なぎに 水手の声呼び 夕
なぎに 梶の音しつつ 波の上を い行きさぐくみ 岩の間を
い行き廻り 稲日都麻 浦廻を過ぎて 鳥じもの なづさひ行け

ば家の島 荒磯のうへに 打ちなびき 繁に生ひたる 莫告藻
がなどかも妹に 告らず来にけむ

反 歌

白栲の袖解きかへて還り来む月日を数みて行きて来ましを

丹比真人笠磨（万葉集）

なにしおへば秋のうちにも播磨鍋ふたゝびにゝる月をみる哉

（七十一番職人歌合）

のぞかなる春の日がたの浦浪に鯛つる小舟けふもいづらし

中務卿のみこ（夫木和歌抄）

はりま潟朝漕ぐ舟のほのかにも見えたる山はあはの島かも

光俊朝臣（夫木和歌抄）

播磨潟あまのかるもの我からや人にしられぬ身をくたく覧

康光（歌合 建保四年）

はりまがた有明寒き朝北に島山つたひかりは来にける

治堅（鴨川集）

はりまがたいかで都のつとにせむゑじまの波よくよしもがな
（賀茂翁家集）

播磨潟磯うつ浪の浪のまに友よぶ千鳥こゑ残るなり

家長（千五百番歌合）

播磨潟磯うつ波は耳馴れてかたぶく月に夢を残しつ

慈鎮和尚（拾玉集）

播磨潟沖のはやてや早からし千鳥啼きよるあはれ島陰

釈幽真（空谷伝声集）

播磨潟こなたかなたに漕ぐ舟は片帆なりとも惜しむ我かな

（仲文集）

はりまかたしらぬ波路にこよひより浦なれそむる月の影哉

散位源家長（正治二年第二度百首和歌）

はりまかたすまの浦風月さえて千とり友よふ明方の空

沙弥静空（正治二年院御百首）

はりまかたすまの浦風波こえてあはちのせとを渡る鹿のね

（宗良親王千首）

播磨がた須磨の月よみそらさえて絵島がさきに雪ふりにけり

前参議親隆（千載和歌集）

播磨がた須磨のはれまに見渡せば波は雲居のものにぞありける

権中納言実宗（千載和歌集）

はりまがた須磨の松原はるぐと白浪ごしに見て渡るかな

木下幸文（亮々遺稿）

はりまがたせとの入日の末晴れて空よりかへる沖のつり舟

（賀茂翁家集）

播磨がた瀬戸のしほ瀬の霧はれて月にちひさし淡路島山

井上文雄（調鶴集）

はりま潟袖や涼しきすま明石己が浦くはるをむかへて

中御門院（今昔集）

播磨潟灘のみおきに漕ぎ出でてあたり思はぬ月を眺めん

西行法師（山家集）

播磨かた浪高砂の風立て室のとまやに日数をそふる

前右大臣（菊葉和歌集）

はりまかた春の日よりになりにけりかすみこめたるあはちしま
やま
（忠盛集）

はりまかた吹塩かせや寒からん妻よふ千鳥声しきるなり

藤原朝臣季経（正治二年院御百首）

はりまかたゆきかふふねのなみまよりほのには見せずしまかく
れすな
（源兼澄集）

はりまかたゆきかふ、ねのほにあけてをのかおもひのまふく
そゆく
（大武高遠集）

播磨がたゆふべのきりのかきけちて絵しまが磯もそことしぞな
き
伴蒿蹊（閑田詠草）

播磨潟絵しま家しまそれならぬ島かとみえて立たる白雲

伴蒿蹊（閑田詠草）

播磨がた系じまが崎にすむ月は影を波間にうつしてぞ見る

村田春海（琴後集）

播磨潟をりよき今朝の船路かな浦の松風声弱るなり

藤原良経（秋篠月清集）

針間路の桜花さく次嶺経山代山とさかりなるべし

(平賀元義集)

はりまちの須磨の上野の初尾花浪かとのみや人のみるらむ

熊谷直好(浦のしほ貝)

はりまちのすまの関守る身なりせばあかぬ別はゆるさざらまし

待賢門院長門(後葉和歌集)

播磨路の須磨の関屋はあれにしを板まの月そ独りもりぬる

(為家卿千首)

はりまちやこぎ出でてみれば雲かゝるむこ山桜今盛りなり

権僧正公朝(夫木和歌抄)

播磨路やこゝろのすまに関据ゑていかで我身の恋をとゞめん

西行法師(山家集)

播磨路や須磨の浦わの有明は月の関とぞいふべかりける

慈鎮(拾玉集)

播磨路や須磨の関屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ

中納言師俊(千載和歌集)

はりまちやすまのせきやをきてみれとすきゆくはとまらさりけり
(有房中将集)

はるのよにねさめてきけははりまかたいをのみなとにちとりなくなり
(大江嘉言集)

舟つなく室のとまりの月影にまた高砂の松の秋風

九条内大臣基家(和漢名所詩歌合)

舟よせむ岸の知るべも知らずしてえも漕ぎよらぬ播磨渦かな

(和泉式部集)

降とても日かさの浦の朝なれば磯より出よ蟹のつりぶね

富春(今昔集)

御もすそのほつれ直せし言のはの国の名にしと成にし物を

読入しらず(古所歌寄)

終夜おほ嶋あらしおろす也たかさこ舟は今そ出へき

隆源(堀川院御時百首和歌)

折えても聞もかしこしはりまがた浦浪とをき山ほとゝぎす

広長(花月和歌集)

柿かぶる身ぞ津の国を出離れて

椎本才磨（椎の集）

大船の儀に干上がる播磨潟

（俳諧觸）

摂州と紀と播磨潟御並び

（川柳評万句合）

船の竈ちよろちよろ見ゆる播磨潟

（湯島集）

六部かと思えば櫛屋播磨潟

（延享3雲鼓評）

ああまた、右翼を天蓋として遠望する夏の空の、今をやや、
茜に紫に染め出でんとする巻雲の、また長い長小豆島の葡萄色
の、見るもはろばろとした南の晴。

東方の家島群島。

私は紅茶のコップを挙げる。硝子眼鏡の、この天景の美しさ。
カラーははねて、白いワイシャツの、白麻のズボンのこの私
のすがすがしさよ。

神仙ならずとも、身に鶴裳は著けずとも、凡下の私も飛びつ
つある。

光れよ、片掌の水蜜桃。

※

塩田、塩田、塩田。

また波の寄る一岬。

山本君が書いて差出すノートを見ると、

「僕の故郷、赤穂新浜村御崎。」

一度に立って敬礼する。

「万歳、撮影々々」

※

すでに日の光は幽かに、一面に燦す薄いガスの海上となりつ
つあつた。

室ノ津、網干。姫路かと思ふあたりを北に眺めて飾磨、高砂、
明石と飛ぶ頃に、雲は夕栄の空を蔽ひて満ち、かぎりつつ、か
ぎりつつ、時には片々たる断雲を白く白く飛ばして、おのづか
らまた蒼茫と暮れつつあつた。

航程四百五十キロ。

大景淡路島の上空遥に四国の連山を遠望して、いにしへの流
謫人等が曾て須磨の明石の松かげから夢想だにしえなかつた、
雲に雲に、新しい向うの暮靄に——ああ、この急速度の旅愁
を寄する私は私は、全く、たしかに天翔り天翔ることの幸福を
知つた。

夕風。

微動だにせぬメルクル。何と平静な快翔。

秀麗な海峡！私の眼は眼の下を西航する一隻の白い大汽船に凝集した。

煙、煙、そのうしろに揺曳する黒い煙も暮れつつある。

北原白秋（旅窓読本）

兵庫讃歌

—いつかきた道への回帰と五弁の花のファンタジア—

摂津・播磨・淡路篇Ⅰ

打ちかすむ丹生山塊——

帝釈、稚子ガ墓、金剛童子。

志染の里が言挙げする帝紀の挿話。

細川の冷たい泉のうたのみち。惶窩、闇齋のみち。通幻、大灯、

盤珪のみち。

短夜の夢の小枕、不来坂、小野原、大川瀬、新定、清水、三草、

室山の兵火のあと。

真弓、大山口、栗賀、田原、光明寺、三木、押部、伊川谷、

和坂の

高氏、秀吉、円心、満祐、宗全のみち。

まがねふく吉備路かけての息長の皇后の軍立ち。

絶え絶えの防人の離愁のうたごえ。

群山かこむ氷ノ川上は遠し、ここはなびつまのあたり、古風土記の山川のさまを整えたたずまい。

鶴林の聖観音。松籟が響の灘へはこぶ尾上の鐘の音。尉と姥の

寝物語。

忘却のむこうの高室役者。群舞する石の羅漢。

千ガ峰、笠形、雪彦、峰山の裾をまく峡谷の里人たちの暮し向

きのありよう。

高御位、生石子の神々の風の中の対話。

さく花のにおうみやこの大寺勧進。

古法華の仙道僧の沖ゆく船への応器行乞。

いかるがの散華が布く一乗真実の道理と如来蔵法と。

小五月祭の棹のうたのしらべがまぶたに描かす遊君済度のひと

こま。

星座群島の風樹は麗人の眉よりも翠に映え、

梅雨明けの空の真上に仰ぐ北斗の揺れる光。

摂津・播磨・淡路篇Ⅱ

胸を張って水揚げ高を誇る美しい海港の夜は万華鏡の豊の明か

り、

それは国の、世界への顔でもあるが、それはそれで

懈怠なく響きに応える阪神沿岸、摂播内陸の生産は熱氣をはら
んで弾み、

躍進六港からのびてひろがる播磨臨海工業地帯の結合企業群の
高鳴る潮が湧きとよまず壮大な通景。

膨大で、野放図の船台では時知らずに咲いて閃き光るあじさい
色の火花。

霧の流れる佐用の山畑、母樹が息づく穴栗の森林が
かわたれ時の垂れ幕を切って落とすきのうきよう。

飛躍の原点、みなとでは白竜の魂振りの祭。

ひっそりと山沢にわさび、片岡にみつまたの花白くさく海内、

奥海の

日名倉山、船越山への平福からのみち。

水に燃えるほたる火の秋里、志文、鞍居、安室、矢野の川々、

杉坂、上月、白旗、苔縄、赤穂の哀史をのせてながれ下る千種

の河口から

長くのびた汀線の、滄桑の変貌からの念入りの化粧立ち。

篠ノ丸の三度鐘。城ノ山なみが虚空に懸ける涅槃の釈迦牟尼仏。

あかつきの夢前、市川の瀬々のめざめのうた。

夕焼けの損保の川かぜに流れる赤とんぼの透けて光る翅。

たゆらぎの山の岑の上の花明かり。

飴磨の市の女房たちの搦染め布の記憶の袖垣が

のじぎくのけなげな命をかばい育てて、

晴れの日に咲かす花々の、目のさめるような群落。

まぶたの中の御形、音水、千草、鹿庭のたたら踏みであっても、

大空を背にぬきん出ようとする人間の意欲の極限を

いっぴきの翔る鳥の生きざまに仮託する行動の具象、造型。

桃山の華麗けんらんをきょうのうつつに

まぶしく光をまき散らして聳える立体。

鉄と鋼の世紀の檜舞台で脚光を浴びる大名題の正念場。

超大型高炉の矢継早の火入れに湧くのは

晴れわたった東瀬戸内の海いっばいにひろがる上げ潮讃歌。

富田碎花

狂乱お夏手毬歌（一部）

春のなかばの——化粧景色は

すみれ、たんぽぽ つくつくし

遊び相手は好いた清十郎さん

花にひらひら

とーんで とーんで もーつれて

蝶はもつれて

松露ころころ砂浜に——

石の宝殿 糸ざくら

曾根の松こそふかみどり色

名を高砂や——加古川に

流すはわたしと清十郎さん

今日も日は暮れ 寺に鐘つく

音はゴーンゴ スートントン

前田林外

みかしは 播磨速待 岩下す 畏くとも 吾養はむ

播磨の国の造の祖速待（日本書紀）

播州洋

暁色濛濛白

暁色濛々と白く

長程風不号

長程風号ばず

播洋落天鏡

播洋天鏡落ち

淡路点秋毫

淡路秋毫を点ず

客気甘蓬転

客気蓬転に甘んじ

遊蹤逐鳥翱

遊蹤鳥翱を逐ふ

金波浮百道

金波百道に浮かび

船上太陽高

船上太陽高し

正岡子規（漢詩稿）

